
僕の行く道、戻る道

もんぢろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が行く道、戻る道

【Nコード】

N4776D

【作者名】

もんぢろう

【あらすじ】

僕の方程式は正しいんだ。「東京」華やか、僕に刺激を。無計画だろが無謀だろが進めるんだ。僕の道を。

決意　く　甘ちゃんが出来るまで　く　（前書き）

はじめてまして。　よろしくお願いします。　頑張ります。

決意　く甘ちゃんが出来るまでく

僕は高校を卒業してからすぐに上京した。

上京したからって、大学に行くわけでも就きたい職業があったわけでもない。ただ、何もない田舎から華やかな東京に出て刺激のある日々を過ごしたかった。　甘い考えだと、世間を舐めていると、両親や友達にもくどいくらい言われた。　でも僕は、変えたかった。変哲もない、僕の人生を

東京には、知り合いなんていなくて。生活するには住居も資金も必要で。学生の時は親の膍をがつりかじっていたわけだから貯金なんて全くないわけで。バイトなんてするほど自立心も発達していない学生だったし、とにかく僕は世間をめちゃくちゃ舐めていた。

「東京＝華やか」という方程式が成り立っていた僕にとって、両親や友達の言葉なんて小指の爪先程も届かなかった。　そんなわけで、上京資金に僕は自分の周りの物を買った。

今まで必死に集めたCD、漫画。お年玉で購入したノートパソコン。揚げ句の果てには卒業アルバム。さすがに他人の個人情報と自分の思い出を売った時は胸が痛んだ。だけど悲しいかな、CDや漫画を売って手にした金額の倍以上になった時はそんな良心なんてあつという間に消えてしまった。

東京に行ける、資金は何とか用意できた。

ただ、住居なし。働くあてもない。

「まあ、いつか。東京なんて働き口いっぱいあるし」そう自分に言い聞かせて上京の準備を進めた。

卒業式の日、快晴だった。

3日前に降り積もった雪も、溶けて水滴が朝日に反射して眩しい。

今晚、僕はこの町を出るんだ。

卒業式は割と淡々と進められた。鼻を齧る音が所々聞こえてきたけど、僕には関係のない響きだったかもしれない。

教室では、抱き合って泣くクラスメート達。

僕といえば、これから刺激的な毎日になるであろうという期待でいっぱいだった。

そんな僕に話し掛ける友達はいなかった。なぜなら大半の友達には、僕の無謀な将来設計に呆れて離れてしまったからだ。

寂しくなんかない。むしろ、僕の高尚な

「挑戦」を理解する事ができないなら僕には必要のない他人だ。

さつさと教室から出ると一人の同級生が話しかけてきた。

「あのさ……」

僕は足を止めて

「なに？」と振り向いた。

相手は、幼なじみの陽一だった。

「体、大事にしろよ」

陽一は笑ってた。

鼻の奥がじんとする。

「ああ……」

僕は陽一の顔を見ないように答えた。顔を見たら、泣きそうになるから。

僕は、最後の最高の友達を自ら断ち切った。

校門を出た時、不甲斐にも涙が零れた。

ありがとう、陽一。やっぱり卒業アルバムは売るんじゃないかなかったよ。

僕は後悔と共に、一步を踏み出した。

決意　く甘ちゃんが出来るまでく（後書き）

自分でキャラクター作ってムカついてしまいました。今でも卒業アルバムって売れるのでしょうか？駄文でごめんなさい。まだまだ続きます。

分らず屋の旅立ち（前書き）

やっと出発しました。

分らず屋の旅立ち

僕は少ない荷物をまとめて、出る準備をした。

あまり長く家に居ると、出る決心が揺らぎそうで怖かった。上京の為に犠牲にした数々の物や断ち切った友達の事を考えると後には引けない。

時計を見ると7時を回っていた。

父はまだ帰って来ない。家を出る前に一言何か言わなきゃと思いい、待っているけど…遅い。

僕はとりあえず、自分の部屋を出て居間に降りていった。

居間には、大学生の姉と母がテレビを見ていた。

僕に気付いた姉が、

「まだ居たの？」と言った。

その言葉にムツとした僕は

「父さん待ってんだよ！それにまだ飯食ってねえし。母さん、飯は？」

少々声を荒げてしまったが母は

「家を出ていくような分らず屋にはありませんよ。世の中、そんな甘いものじゃないからね。考え直すなら作るけど？」

僕は側頭部を鈍器で殴られたようだった。シヨックで固まっている僕に姉は更に追い打ちをかける。

「家出るって決めたら、人を頼るなよ。」

早速、甘ちゃんの本領発揮か？大体から人の話聞かずに、自分で勝手に話進めるし。無計画の上に超無謀。父さん待ってるって何？小遣いでもせびろーっての？そんなんだったらアンタ、張り倒すよ？あゝ分かった。東京行くのが怖くなっただんでしょ？アンタが馬鹿でも、世の中物騒ってことくらいわかるもんね。揺るぐ決心だったらやめとけば？そんな甘い考えだと野垂れ死にしちゃうし」

姉はマシンガンのごとくまくし立てると満足したのか視線をテ

レビに戻した。

母に目線を向けるとうんうんと何度も頷いている。

僕の中で何かが弾けた。

「もういい！俺は行くから。」

そう叫ぶと、小さな荷物を担いだ。

僕の大きな声に驚いたのか二人とも大きく眼を開いていた。

背中越しに母が何か言っていたけど、僕は無視して玄関のドアを乱暴に閉めた。

外に出たら、ヒヤリとした冷たい風が頬を撫でた。

鼻の奥からじんと込み上げるモノをぐつと堪える。

僕は顔を上げて、前を見据え、大きく右足を踏み出した。

東京到着と初めての壁（前書き）

よろしく願います。

東京到着と初めての壁

地元を出発してから3時間半。新幹線の中で、終点である東京駅到着のアナウンスを聞いた。

僕の手の中には片道切符。切符を強く握り絞めると荷物を降ろした。

移動中に良く寝たせいか頭はすっきりしている。

とりあえず、今日はどうしよう…

飯食ってないのに食欲がないのは興奮のせいかな、それとも緊張か。

とりあえず僕は明るい方へ歩き出した。

ビジネスホテルにでも泊まろうか、僕は財布の中を確認する。

中身は今まで入れた事のないような金額が入っているけど…無駄な出費をするわけにはいかない。

中身を見ながら悩んでいると道端で寝ているオジさんが視界に入った。

（浮浪者みたく此处で寝るか…？）僕は心の中で問い掛けてみる。

（いやいや、ちょっと待て。俺は今、大金を所持してるんだ。寝てる間に盗られたりしたら…その前にカツアゲとかされたら…）僕の中で不安が膨らむ。ここは多少の出費はやむ得ず、安全をとる

か、それとも儉約・節約を重視して浮浪者のオジさんと仲良く寝るか…

頭の中でいろんな意見が飛び交い、悶々とした。

周りでは、深夜なのに人が流れていく。

春とはいえ、まだ風は冷たい。きつと、野宿なんてしたら風邪ひくだろう。新たな不安要素が追加される。

上京して4時間強が経過した。

もうすでに僕は、『壁』にぶち当たってしまった。

今まで当たり前のように布団で寝て、当たり前のように用意さ

れた飯を食べ、なにもかも当たり前のように過ごしていたから…

こういう状況に発って初めて気付く、驕り高ぶっていた自分。

姉の

「野垂れ死にしちゃう」という言葉が頭の中に響く。

僕がこれが『刺激』である事に気付くのはもう少し後になる。

東京到着と初めての壁（後書き）

私が当たり前が当たり前じゃないって気付くのは社会人になってからでした。

朝が来ると…（前書き）

少年から青年に変わる瞬間の描写って難しいですね。頑張ってます。頑張ってます。

朝が来ると…

ピピッピピッ

携帯電話の目覚ましが鳴り響く。

僕は音のほうへ腕を伸ばした。薄いカーテンから朝日が差し込む。

重い瞼を擦って体を起こす。寝慣れない固いベッドがギシリと鳴る。

昨日結局、安全を優先させてビジネスホテルを選んだ。

昨夜から何も食べていないせいか、ぐぐつと腹が鳴った。

現金なもので、一晩過ごせたという安堵からか、昨夜の不安ななんて消えてしまっていた。

僕は備え付けてあった歯ブラシと安っぽい歯磨き粉を使って精一杯の身支度をした。

時々、昨夜の小心者な僕に失笑しながら小さな荷物を整理する。荷物をまとめても、チェックアウトまで時間がある。

僕は携帯の画面を何気なく見た。

着信も無ければメールもきていない。

あれから父はすぐに帰宅したのだろうか？母や姉から何も聞いていないのだろうか？

何も鳴らない携帯に目を落とし、少し悲しくなった。

そんな事を考えていると、僕は我に返り、首をブンブンと振った。

（何を考えてんだ、俺は！うちは放任だったじゃねーか！そもそも、俺自身が決めて出てきたんだ！）

さらに僕は両手で顔を挟むようにしてバシバシ頬を叩く。

（しっかりしろ！俺には捨てるモノはない！前を向け！振り返るな！）

自分を叱咤し、気合いを入れる。両手と頬がジンジンする。
鏡を覗くと案の定、真っ赤になっていた。

まるで田舎から出てきた小心者そのものだった。

（まったく、そのまんまだ）

そう思うと、自然に笑みが浮かんだ。

僕は勢い良く荷物を掴み、部屋を出た。

さあ、仕事を探そう。

午前10時、僕は少しだけ強くなった気がした。

朝が来ると…（後書き）

私の気合いの入れ方はこんな感じです。

第一歩　く天使の導きか？く（前書き）

ぜひとも評価をお願いします。

第一歩　～天使の導きか？～

ビジネスホテルを後にして、僕は仕事を探すことにした。
探すといってもただブラブラ歩いてるだけ。

携帯で就職サイトを見てみたり、コンビニとかに直接交渉に行ったり。

思い当たる事を全て行った。

自分でも驚く程、行動力が溢れてくる。

行動力が湧けば、自然と頭の回転も良くなるもので…ただ働くだけじゃ生きていく事ができない。住む場所も見つけなければ。

僕は今フル回転している頭を使って住み込み可の仕事を探した。
町外れに向かつて歩くと急募の広告が目に入った。

『急募！18～40歳の健康な方。新聞配達のお仕事です。住み込み可。』

これだ！僕は広告を見つめて息を飲んだ。

ゆつくりと広告の貼ってある、扉に向かって引き戸に手を掛けた。

「ごめんください…」

僕は扉を半分くらい開け、覗くように声を掛けた。

薄暗い店内は、何となく小綺麗で奥には山のように広告が積み上げられていた。

人の気配が感じられず、僕はもう一度声を掛けた。

「すいませ〜ん。どなたか…」

「はい？」

急に背後から返事がした。

「うおっ!？」

びつくりして思わず、変な声を出してしまった。

「ご、ごめんなさい。…あの、何かご用ですか？」

申し訳なさそうに謝った声の主は、女の子だった。歳は僕と同じ年か、少し上か、明るい茶髪が印象的な子だった。

ちよつとタイプかな、なんて考えていると

「あの…?」

と不審がつているのか、軽く睨むように見てきた。

「いや、あのっ、表の求人見て…」

「そうですか。じゃあ、奥へどうぞ。」

女の子は僕を擦り抜けて促した。

振り返ってニコツと微笑まれると、思わずドキドキした。

第一歩 〽天使の導きか?〽 (後書き)

実はアルバイト経験はスーパーのレジしかないんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776d/>

僕の行く道、戻る道

2011年1月13日01時50分発行